

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

今夏は猛暑が続いた。観測史上初めて国内最高気温が 41 度に達し、東京では最低気温が 30 度を下回らない「超熱帯夜」が出現し、北海道では初めて道内で 3 日連続熱帯夜となったとのことである。ゲリラ豪雨の被害も甚大である。東京隅田川の花火大会が途中打ち切りで中止になったのも初とのことである。小生が生きているたかだが 55 年間だけでも、気候の変動が激しすぎる。次世代への芳しくない影響が計り知れない。この地球温暖化の問題に、なお一層人類の英知を結集してもらいたいと感じているのは筆者だけではないと思う。

さて、本号の掲載論文は 10 編であり、原著 1 編、症例報告 8 編、臨床経験 1 編となっている。投稿施設は東北秋田から、九州まで偏りなく、大学病院から 3 編、一般病院から 7 編となっており、一般病院の頑張りが感じられる。特に原著 1 編は一般病院からの「直腸癌における神経周囲浸潤の臨床病理学的意義」である。400 例以上の症例をまとめた詳細な検討結果であり、非常に興味深く拝見した。敬意を表したい。症例報告も、珍しく教育的な症例から、外科医が勇気付けられる、元気付けられるようなものまで *variety* に富んでいる。1 例 1 例真摯に患者さんに接し、中には若くして残念な結果に終わってしまった報告もあるが、外科医の熱い思い（この熱さは *welcome!*）がひしひしと伝わってくる。

本号掲載論文に小生が査読した 1 編が含まれている。ほとんどの投稿論文が一発で *accept* されることはまずなく、*accept* までには 1,2 回 *reviewer* と執筆者でやりとりがかかわされる。今回、掲載される論文におけるやりとりを思い出すと、自分がかかわった論文が日の目を見るようなうれしい気持ちになる。大変な業務ではあるが、査読者冥利につきると感じる瞬間でもある。

本学会雑誌は日本一の医学系和文雑誌であり、我々消化器外科学会員の誇りでもある。この熱い思いを絶やすことなく、消化器外科の英知を結集していこうではありませんか。

(瀬戸 泰之)

2013 年 9 月 1 日